

機 関 名	東京大学、ハイティング・センター、国立衛生研究所、ペンシルヴァニア大学、ケースウェスタンリザーブ大学、オックスフォード大学、ベルゲン大学、モナシ大学、シガポール国立大学	
拠点のプログラム名称	次世代型生命・医療倫理の教育研究拠点創成	
中核となる専攻等名	大学院医学系研究科・健康科学・看護学専攻	
事業推進担当者	(拠点リーダー) 赤林 朗 教授	外 26 名

【拠点形成の目的】
 今日のグローバル化された現代社会においては、ライフサイエンス・医療技術の発展が社会に与える影響はますます広範かつ多大なものとなっており、クローン技術、ES・iPS細胞等を用いた再生医療、脳科学、ヒトゲノム研究や、急増する海外共同治験などの国際的共同研究、また終末期・生殖補助医療などによって次々と生み出される倫理的・法的・社会的諸問題(ELSI問題: ethical, legal, social implications)への対応は喫緊の課題である。

こうした課題に対応するには、ライフサイエンスや医療の社会的規制のためのシンクタンクとしての研究拠点と、適切な研究審査のできる倫理委員や医療現場で起きる倫理問題に対処できる人材(国内では約5万人程度)とその指導者の育成が急務である。生命・医療倫理学は、学際的な取り組みを通して、ライフサイエンスや医療技術がもたらす倫理的・法的・社会的課題に取り組む学問である。しかし、これまでの日本の生命・医療倫理学は、人文系においては欧米の文献を紹介する座学が中心であり、医学系では実践的だが体系性に欠ける臨床倫理や研究倫理が中心であったため、十分にこうした現代的な課題に応えられてこなかった。さらに、以上のような課題に対応できる次世代の人材もほとんど輩出してこなかった。

以上の現状認識を踏まえ、本教育研究拠点は、ライフサイエンス・医療技術が日本社会および国際社会にもたらす倫理的・法的・社会的諸問題に関して学際的に研究すると共に、国外の研究拠点と連携することで、質の高い国際ネットワークを形成する。そして、政策、研究および臨床という実践の場に適した教育プログラムを提供する。これらにより、国際的な場で今後リーダーシップを発揮して活躍することのできる高度な人材を養成し、次世代の国際標準となる生命・医療倫理の教育・研究拠点を創成する。

【拠点形成計画及び進捗状況の概要】
 (1) 世界の主要な生命・医療倫理教育研究拠点のネットワーク形成(GABEX: Global Alliance of Biomedical Ethics Centersプロジェクト): 二度のGABEX国際会議は世界のトップクラスの拠点からのシニアおよび若手研究者を招いた国際間対話を成功裏に終えた。また、テレビ会議システムを導入し、拠点間の活発な交流を促進した。こうして生命・医療倫理の実質的な国際ネットワークを築くに至っており、本拠点は生命・医療倫理領域におけるハブ拠点としての地位を確立しつつある。同時に、多国間の対話を通して、生命・医療倫理の領域でも、日本・アジアにおける地域的な価値と、すべての文化圏に通底する普遍的な価値から構成される実践・制度が可能であることが示唆され、次世代型の国際標準の生命・医療倫理学の創成に向けて大きく前進した。

(2) 生命・医療倫理の三領域(研究倫理、臨床倫理、公共政策)の新展開: 研究倫理においては、研究倫理セミナーの実施、研究倫理ガイドの公表、研究倫理支援センター(NPO)の設立を行い、研究倫理審査学の土台を確立した。臨床倫理においては、臨床倫理セミナーの実施、患者相談ケースブックの出版を行い、臨床倫理コンサルテーション学の礎を築いた。公共政策においては、とくに2009年の新型インフルエンザのワクチン配分をめぐる政策形成過程に寄与することで、全国実態調査と政策提言の機能を備えた生命・医療倫理シンクタンク機能の構築・実践を行った。

(3) 基礎・専門・発展の三段階からなる、生命・医療倫理教育プログラム: 基礎コースでは、総合大学としての強みを活かした学際的な生命・医療倫理学基礎コースを開講し、他学部からの学生を積極的に受け入れて学際的な講義を実施した。専門コースでは、基礎コースを修了した若手研究者・大学院生を中心に、専門能力を育むことを主眼に、UT-CBEL国際セミナー、国際共同研究プロジェクト、臨床現場や行政機関へのインターンシップを実施してきた。発展コースでは、若手研究者と海外の研究者の間のより密接な研究交流を促し、次世代の生命・医療倫理研究に際して必須とされる国際的交流力・競争力の育成を目指し、GABEX国際会議と国際フェロシップ制度を実施した。その成果として、生命・医療倫理学は比較的新しい学問領域であるにも関わらず、若手研究者のキャリアパスの確立が着実に進んでおり、本拠点の教育を受けた者数名が関連領域で就職した。

(4) アウトリーチ活動: 社会人向け生命・医療倫理短期コース(リカレント教育)の実施、MRの倫理教育e-learning教材の開発、一般向けの生命・医療倫理教育用Webコンテンツの開発、高校生向けの教材開発や出前授業、地域住民との双方向性コミュニケーション、日本語・英語のウェブサイトの作成、ポッドキャストやニュースレターによる一般人向け情報発信等を行い、臨床や医学研究の現場や社会一般に対する貢献を行った。



(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、本拠点形成プログラムは十分戦略的なものとして位置付けられ、よく機能している。専任教員や総長補佐からなるCOEプログラム推進室のマネジメント体制の下、博士課程学生への支援策として授業料免除者枠の拡大、私費留学生への東大フェローシップ支給拡大、「研究遂行協力制度」の見直しなど、全学的、重点的な取組みがなされていることは高く評価できる。

拠点形成全体については、世界の主要な生命・医療倫理教育研究拠点のトップクラス研究者や若手研究者を招いたGlobal Alliance of Biomedical Ethics Centers プロジェクト (GABEX) の2度にわたる会議開催に代表される国際連携の確立、生命・医療倫理教育プログラムを通じた人材育成の推進、出版等を通じた研究成果の社会的還元など、拠点形成計画は着実に進展している。

人材育成面については、大学院学生を対象にした基礎・専門・発展の三段階からなる、生命・医療倫理教育プログラムが順調に進展し、教育拠点としてよく機能している。また、若手研究者のキャリアパスの確立が進んでおり、プログラム受講者の関連領域への就職が促進されている点は高く評価できる。

研究活動面については、新しい領域である「次世代型生命・医療倫理学の構築2008-2009」の公刊、更には「Biomedical Ethics in Asia: A Casebook for Multicultural Learners」の出版など、優れた学術的成果をあげている。

補助金の適切かつ効果的使用については、消耗品費を中心とする事業推進費、人件費、旅費など、効果的に使用されている。

留意事項への対応については、科学コミュニケーション論を専門とする教員を新たに事業推進担当者に加えるなど、十分に対応していると評価できる。

今後の展望については、研究倫理NPO法人など、本事業で確立したシステムや教育研究事業が本事業終了後も発展的に継続できるような構想が既に検討されている。今後、更に東京大学に限らず、全国的あるいは国際的に活躍する場の構築が望まれる。